

ないでしょうか。そんなヒントの一つが、農家の暮らしの中にあるように思われます。

(千葉・セイダイ農場)

小児病棟と中学校での

『空間』『づくりから』

倉田 知子

小児病棟での『空間』づくり

親や先生など直接的な存在以外に、ほどよい距離で自分を大切に見守ってくれる大人の存在、その大切さに注目して取り組まれている二つの『空間』づくりについて考えていきたいと思います。

ある小児病棟のプレイルームに、大きな紙袋を提げた、先生でも看護婦さんでもお母さんでもないエ



ブロン姿の私たち（二名交代）が登場することから、その『空間』は幕を開けます。パジャマ姿の子どもたちが時には手に点滴をしたまま、「今日はどんなものがあるかな」と袋の中から材料をひっぱり出し自分のイメージを膨らませて工作を始めたたり、絵本を読んでもらったりとそれぞれが自分のしたいことを始めます。私たちは彼らの気持ちが出来ただけ満足のいくように援助して時間を共有します。

（この病院内保育ボランティアの活動は、お茶の水女子大学児童学科同窓会「ジネット」の会員の希望が、ある小児精神科医の「小児病棟を子ども村のようにしたい」という願いと重なり実現したものです。今まで十三名が参加しました。）

この『空間』を創っている姿勢は何でしょうか。「いつも」とは「違う時間の流れ」を感じて欲しいという願い——先生でも看護婦さんでも親でもない私たちは病気のことは殆ど知りません。そんな存在

の私たちと居るということは、子どもたちの心が「日常」とは離れて「今、この時」を感じ、楽しさで体を満たすことができることにつながります。それはすなわち、「遊びに没頭する」という行為により、自分を「病気」というくくりから離し、自分に潜在している力とゆつくりと戯れ、時にはその力を表現できるということです。

発達の連続性を見守る——信頼感安心感のある『空間』の中で——この様な『空間』において子どもは、病気ということでも途切れはしない自己の連続性（発達の連続性）の中に身をおくことが保障されます。すなわち子どもたちは「病気の自分」ではなく「成長の過程としての自分」を感じることが出来るのです。私たちは、「見守る者」として、常に子どもとの信頼関係を大切にし、また外に現われた行為にいつもその裏にある気持ちを感じ取りながら、自然体で接することで子どもが大きく息を吸える『空間』にしたいと思っています。

中学校での『空間』づくり

その『空間』は、中学校内の一隅、赤いギンガムチェックのカーテンとクツション、ソファ、ぬいぐるみ、数冊の本、数点のゲームや手芸用品等を邪魔にならない程度においた空き教室に、「先生」でもなくお母さんでもない、生徒たちが自分勝手に呼び方を決められるような存在の私（いわゆる「相談員」という立場）が行くことによって幕が開けられます。この『空間』に来る子はどんな子であってもこの場を必要としているのだという想いのもと、広く門戸を開き、かつ深く付き合える『空間』を作ろうと思いました。そんな想いが、「ここって落ち着くね」「ここに居ると学校か家か判らなくなる」という生徒たちの声になって返ってきます。

この『空間』を創っている姿勢について考えました。

『間』を大切にする——思春期においては、自意識が高まり、他人の評価が気になる分、疎外感を多く感じたり、理想と現実とのギャップに苦しむことがあります。そもそも思春期だけに限ったことではありませんが、変化（成長）というものには時間がかかります。

例えば、しばしばあることですが、三年の間には気のあう仲間（グループ）は当然変化します。ある仲間関係が崩れて新しい関係に移行する時、その子は失っていくものへの不安と先行きの不安の渦の中にいて、時には「……された」と被害感を多く感じやすくなったり、一人ぼっちになってしまったような感覚を味わいます。そして、更に複雑なことにはそのような時、今までの人生で味わってきたような経験が重ね合わされ、「またあのような辛さを味わったらどうしよう」と、整理されていなかっただけの気持ちの吹き出し、今とダブって揺れを大きくします。そんな時、揺れている今の気持ちを大事に

思い、じっくりと自分の「生」を整理できる『空間』でありたいと思っています。

またそれは例えば、自分の心の中にずっと溜めてきた気持ちをどうしても抱えきれなくなった、そんな時にこの場で思い切つて出してみる、すると口から出したことで何かが自分の中で変化するそんな『空間』でもあります。

成長とは決して一直線ではなく行きつ戻りつらせん状に進むもの。何かが変わるまでの『間』は混沌としていて、時には大人にとって否定的に見えることであるかもしれません。でもその『間』は、充分にその子の中に確実なものが育つまでの「可能性を秘めた時間」であるということを確信し、子どもの揺れに付き合い、しかもその揺れに動じず、その子のエネルギーを大人として大枠のところまで真摯に受け止める——「豊かに悩む」——その事を見守っていきける『空間』でありたいと思います。

学級でもなく、家庭でもない「中間的な空間」で

ある——それは即ちその子を取り巻く価値観、評価からは自由である『空間』として存在する——そのことに意味が在ります。子どもの側からいえば、自分に必要な関係を自分のイメージで創っていきける、新しい自分を演じてみることができるとんな場です。それは、母親や先生という直接的な、「なくてはならない」関係ではなく、自分から選べる関係だから出来ることでもあります。しかもこの『空間』では、そのことについての評価は気にせず、安心して話すことが出来るのです。（昔は、ある意味では、地域社会がこの役割を担っていることができました。）

*

「生の貧困」という言葉に今の子どもたちの状況が読み取れてしまうような昨今、子どもを早急に一つの価値観でくくらずによりしなやかなに生きることを保障する大人が存在し、子どもたちが安心して立ち止

まれ、ゆったりと多様な生を試すことができる、そんな『空間』が多くの子どものたちの周りに創られる

ことが、子どもたちの未来を豊かなものにするのではないでしようか。
(東京都文京区在住)

豊かな自然が私の原点

金井久美子

内モンゴル・哈拉薩（ハラサ）にて

夕刻、寝台列車で北京を出発、中国内モンゴル自治区第二の都市包頭市へ向かう。翌朝駅に着き、さらに乾いた大地の中をバスで走り続けること四時

間、オルドス高原に位置する人口一万人の町、伊金霍洛（エジンホロ）旗、哈拉薩（ハラサ）へやっと到着です。この地へは年に四、五回、地球緑化センターの植林ボランティアが訪れますが、町の中を緑のバンダナをして歩いていると、現地の人々が「日